HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アウグスト・ベークの解釈学
著者	安酸，敏眞
引用	年報新人文学，6：8-40
発行日	2009-12-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

アウグスト・ベークの解釈学

安酸　敏眞

はじめに

解釈学（Hermeneutik）が現代哲学の中心的トピックの一つであることは、ハイデッガー、ガダマー、リクールなどを引き合いに出すまでもなく、異論の余地がない。これに対して、少なくともわが国では、歴史主義（Historismus）の議論は過去のものとなっており、今日それについて語られることは稀である。しかしドイツでは、前世紀の八十年代以降、歴史主義に関する論議が活発化してきて、ふたたび新たなアクチュアリティを獲得している(1)。すなわち人文・社会科学の複数の分野で、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての学問論に対する再評価の動きが起こり、ハルナック、ウェーバー、トレルチ、シェーラー、カッシーラーなどの業績の見直しが精力的になされている。歴史学の分野でも、十九世紀後半から二十世紀初頭の歴史学や社会学の諸理論について、学問的に検証し直す作業が行なわれている。こ

うした見直し作業において歴史主義に注目が集まる理由は、歴史主義がその当時の人文科学と社会科学の議論の中心に位置していたことと、それによって提起された根本的な問題が未解決のまま今日に至り、形を変えて現代の主要な問題となっているからにほかならない。ところで、歴史主義の概念史・問題史を再検証する作業を通して、筆者は解釈学の成立と歴史主義の水源が深く関係しているのではないかという、少なくともわが国においてはまだ十分に検証されていない、思想史的連関についての直観を抱くに至った(2)。

一般的解釈学のパイオニアは、いまや定説となっているが、「近代神学の父」と称されるシュライアーマッハーである(3)。研究者のなかには、解釈学に関する彼の最初期の草稿にすでに歴史主義の萌芽が察知できると見なす者もいるが(4)、しかし卓越したプラトン学者でもあった彼は、むしろ本質的には「非歴史的な思想家」(ein unhistorischer Kopf)(5)であったという評価もあり、いずれにせよ、彼の解釈学を一瞥する限り、解釈学と歴史主義の積極的な結びつきは認められない(6)。しかし一八〇四年以来、シュライアーマッハーとはハレ大学では教師と学生の関係に、ベルリン大学では同僚の関係にあったアウグスト・ベーク(7)になると、われわれがこれから考察するように、解釈学のなかに歴史主義の契機が濃厚に流入してくる。解釈学と歴史主義のこの結びつきは、さらにベルリン大学におけるヨーハン・グスタフ・ドロイゼンとヴィルヘルム・ディルタイにおいて一層深まってくると同時に、深刻な問題と化してくる。

A・ヴィットカウによれば、歴史主義の問題史の発端は、人間とその文化が「歴史的に成ったもの」(die geschichtliche Gewordenheit)であることの自覚と、「人文科学における歴史学的認識方法の確立」

であって、この両契機は大局的に見れば、「十八世紀末以降、とりわけ十九世紀において遂行された、西洋的思惟の歴史化という同一の包括的な精神史的現象の異なったアスペクト」である。そして思惟の歴史化という現象のこの二つのアスペクトを最初に洞察したのが、ヤーコプ・ブルクハルトとドロイゼンであるという[8]。この見方はそれ自体としては間違いではないが、この二人から出発すると、シュライアーマッハーにおいては歴史主義と結びついていなかった解釈学が、なぜそれと結びつくようになったのかは明らかにならない。しかし解釈学と歴史主義の結びつきは、ドロイゼンとブルクハルトの共通の師であるベークの古典文献学に遡ることによって、はじめて明確に見えてくる。ドロイゼンはベルリン大学でのベークのゼミ生であり[9]、ランケのゼミに属していたブルクハルトもベークの講筵に列している[10]。ちなみに、ディルタイもベークのもとで教授資格を獲得している。このように見てくると、シュライアーマッハー-ベーク-ドロイゼン-ディルタイという思想的系譜が成り立つのであり、実際ディルタイ自身がこの系譜を深く自覚している[11]。F・ローディは「ベークとドロイゼンを越えてディルタイへと至るシュライアーマッハーの解釈学の道」[12]について語っているが、われわれがここで注目すべきは、かかる解釈学の系譜において、とくにベーク以降、歴史主義という別の契機がそれと密接な関わりをもって、参入してきていることである。ここにわれわれがベークに注目する理由がある。解釈学と歴史主義の邂逅と結合は、ベークの古典文献学、とりわけその解釈学理論において、興味深い仕方で生起しているからである[13]。

周知の通り、ベークは文献学の本来の任務を、「人間精神によって生み出されたもの、すなわち、認識されたものを認識すること」(das Erkennen des von menschlichen Geist Producirten, d.h. des

Erkannten）と見なしたが[14]、彼はこの「認識されたものの認識」を、術語的には、「理解」（Verstehen）として捉えた。草創期のベルリン大学哲学部の「《スター軍団》の一人」[15]であったベークの功績は、「古典文献学を歴史科学に変化させた」[16]ことである。そして彼の精神を継承して歴史学全体に及ぼし、歴史科学の中に解釈学モデルを導入したのが、「プロイセン・小ドイツ学派の真の創始者」[17]ドロイゼンである。ドロイゼンによれば、「歴史的方法の本質は探究しつつ理解することである」[18]。歴史学は、「歴史として伝承されているものを反復しなければならないだけでなく、より深く突き進まなければならない。それは、いやしくも過去からふたたび見つけ出されるべきものを、およそ可能なかぎり、精神においてふたたび生き生きと甦らせ、それを理解しようとする」[19]ものである。ここからわかるように、ベークの「認識されたものの認識」（das Erkennen des Erkannten）とドロイゼンの「探究しつつ理解すること」（forschend zu verstehen）とは通底しており、しかもそこに解釈学と歴史主義の両モティーフが密接に連関しているのが見いだされる。ベークとドロイゼンの相互関係についてはCh・ハッケルの研究書があるが、解釈学と歴史主義の関係性に関しては、この書ではまったく触れられていない[20]。この点に関しては、J・グロンディンが示唆に富む洞察を提示している。彼は『哲学的解釈学入門』という啓発的な書物において、第三章「ロマン主義的解釈学とシュライアーマッハー」に引き続き、第四章を「歴史主義の諸問題への参入」（Einstieg in die Probleme des Historismus）と銘打ち、そこで「1．ベークと歴史的意識の明け初め」、「2．ドロイゼンの普遍的史学論―倫理的世界の探究としての理解」、「3．解釈学へと至るディルタイの道」について論究している[21]。しかしこれも所詮は概説の域を出るものではなく、したがって解釈学が歴史主義の問題へと歩を進めていく事態は、より本格的な学問的

検証を必要としている[22]。

以上のような問題意識から、本稿ではアウグスト・ベークの解釈学にスポットを当て、とくにそこにおける解釈学と歴史主義のモティーフの絡み合いを考察してみたい。

1. ベークの古典文献学の体系と構造

ベークの解釈学がいかなるものであるかを知るためには、われわれは彼の『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』*Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*（1877, ^{2}1886）を考察しなければならない。この書は門弟のブラトゥスヘックがベークの生前の講義を整理して恩師の死後に出版したもので、そのもとになっているのは、一八〇八年夏学期（ハイデルベルク大学）を皮切りに、一八六五年夏学期（ベルリン大学）に至るまで、ベークが合計二十六学期にわたって学生を相手に行なった講義ノートである。全体で九〇〇頁近くにも及ぶこの大著は、「序論」（Einleitung）に引き続く本論が大きく二つの部分に分けられており、「第一主要部」（Erster Haupttheil）は「文献学的学問の形式的理論」（Formale Theorie der philologischen Wissenschaft）と名づけられている。この部分はさらに二つの部分に分けられ、第一部は「解釈学の理論」（Theorie der Hermeneutik）、第二部は「批判の理論」（Theorie der Kritik）となっている。

「古代学の実質的諸学科」（Materiale Disciplinen der Alterthumslehre）と名づけられた「第二主要部」（Zweiter Haupttheil）は、「一般古代学」（Allgemeine Alterthumslehre）と「特殊古代学」（Besondere

Alterthumslehre）に大別され、前者においては古代ギリシアの特質と古代ローマの特質が、国家生活、私的生活、儀礼および美術、学問などの面から考察され、むすびでは「古典古代の世界史的意義」が論じられている。後者は、「Ⅰ．ギリシア人ならびにローマ人の公的生活について」、「Ⅱ．ギリシア人とローマ人の私的生活」、「Ⅲ．外的宗教および美術について」、「Ⅳ．古典古代の総合的知識について」という大見出しのもとに、Ⅰでは①年代学、②地理、③政治史、④古代国家が、Ⅱでは①度量衡学、②外的な私的生活あるいは経済の歴史（a．農業と工業、b．商業、c．家政）、③内的な私的生活あるいは社会の歴史（a．社交、b．営利団体、c．教育、d．葬儀）が、Ⅲでは①祭儀または外的宗教（a．神事としての祭儀、b．儀礼的行為、c．宗教教育としての儀礼、d．神秘）、②美術史（A．造形美術――a．建築、b．塑像術、c．絵画。B．運動的美術――a．体操術、b．舞踏、c．音楽。C．詩的演出の美術――a．ラプソディー、b．合唱、c．演劇）が、Ⅳでは①神話、②哲学史、③個別諸科学の歴史（a．数学、b．経験的自然科学、c．経験的精神科学）、④文学史（ギリシア文学史――A．韻文〔a．叙事詩、b．叙情詩、c．劇詩〕、B．散文〔a．歴史的散文、b．哲学的散文、c．修辞的散文〕。ローマ文学史――A．韻文〔a．劇詩、b．叙事詩、c．叙情詩〕、B．散文〔a．歴史的散文、b．修辞的散文、c．哲学的散文〕）、⑤言語の歴史（A．語素学〔a．音韻学、b．古字学、c．正字学ならびに正音学〕、B．語源学〔a．辞書学、b．語形学〕、C．統語論、D．歴史的文体学〔韻律論〕）が論じられている。

以上の概要からわかるように、解釈学の問題は「第一主要部」の「文献学的学問の形式論」において、それもとくに第一部「解釈学の理論」において、重点的に論じられているが、もちろん他の部分においても解釈学の問題が適宜扱われており、むしろ『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』

と名づけられたこの書物自体が、あるいはそこに示された古典文献学の体系そのものが、ベークの解釈学をよく表している。

ベークによれば、文献学は①「古典古代研究」(Alterthumsstudium)でも、②「言語研究」(Sprachstudium)でも、③「博覧」(Polyhistorie)でも、④「批判」(Kritik)でも、⑤「文学史」(Literaturgeschichte)でも、⑥「人間性の研究」(Humanitätsstudium)でもなく、それの本来的課題は「認識されたものの認識」(das Erkennen des Erkannten; die Erkenntniss des Erkannten)[23]である。しかしわれわれが注意を払わなければならないのは、第一に、ベークがここで文献学的認識活動の対象として設定している「認識されたもの」が、単なる狭義の認識活動の成果や産物を指すのではなく、人間精神の活動の全産物を意味していることである[24]。「人間精神によって生み出されたもの、すなわち、認識されたものを認識すること」[25]という有名なフレーズが、何よりもこのことを暗示している。文献学の対象は単なる言語や文学や言語資料ではなく、「一つの民族の、身体的ではなく、倫理的ならびに精神的な、活動の全体」、あるいは各民族の「精神的発展全体、その文化の歴史」[26]だということである。第二に、文献学的認識は――プラトンに従えば、哲学的認識もまたそうだということになるが――「再認識」(Wiedererkennen; Wiedererkenntniss)[27]だということである。哲学と文献学は、精神の認識に関しては協調関係にあるが、その認識の仕方は異なる。「哲学は原初的に認識する、つまりギグノースケイ(γιγνώσκειν)〔知る、認識する〕であるが、文献学は再び認識する、つまりアナギグノースケイ(ἀναγιγνώσκειν)〔再び知る、再認識する〕である」[28]。文献学は「所与の認識」[29]あるいは「所与の知識」[30]を前提としており、これを再認識しなければならない。したがって、「文献学の概念は最広義の歴史学の概念と重なり合う」

が、しかし文献学の目的は、歴史学と違って歴史叙述そのものではなく、「歴史叙述のなかに貯蔵されている歴史認識の再認識」[31]である。

ベークによれば、歴史的行為そのものは一つの認識であり、また「歴史的に生み出されたものは、行為へと移行した精神的なものである」ので、「あらゆる精神的生と行為」[32]についての「認識全体の再構成としての文献学」[33]は、各民族の文化的伝承に含まれている「全認識とその部分を歴史的に構成すること」、また「かかる認識のうちに表現されている理念を認識すること」[34]を目的とする。換言すれば、「人間精神が構成したいろいろなものをその全体において追構成すること」(die Nachconstruction der Constructionen des menschlichen Geistes in ihrer Gesammtheit)[35]が、文献学が目指すところである。それゆえ、文献学は所与の認識の「再構成」(Reconstruction; reconstruiren)[36]ないし「追構成」(Nachconstruction; nachconstruiren)[37]を旨とし、かかる仕方での認識の「再生産」(Reproduction; reproducieren)[38]に関わるが、興味深いことにベークは、「少なからぬ哲学は純粋に生産しているとの思い違いをしているが、ここにおける〔文献学的な〕再生産のなかにはより多くの生産がある」[39]と述べて、一部の哲学よりも文献学の方が学問的により生産的であると主張している。それに続けて彼は、「文献学的な才能」(philologisches Talent)はいかなる学問にも大切であると言う。なぜなら、それは「理解の源」(die Quelle des Verstehens)であるが、「理解するということは決してそんなに容易い事柄ではない」[40]からである。

2．ベークの解釈学の基本的特質

前節での考察から、ベークの文献学の体系において、解釈学がいかに枢要的意義を有しているか予想がつくが、彼によれば、「所与の認識の再認識」(eine Wiedererkenntniss eines gegebenen Erkennens)、あるいは「認識されたものを再認識すること」(ein Erkanntes wiedererkennen) は、「理解すること」(verstehen) を意味する[41]。 したがって、「認識されたものの認識」として定義された彼の文献学は、それ自体が解釈学をうちに含み、解釈学の上にその体系が基礎づけられている、と見なすことができる。彼の言うところに従えば、文献学は「理解の行為」(der Akt des Verstehens) と「理解の諸契機」(die Momente des Verständnisses) を学問的に探究しなければならず、それゆえ「そこから成立する理論」、つまり「文献学的なオルガノン」を含んでいなければならない。しかし文献学はそのような形式的な理論（解釈学）にとどまるものではなく、さらには「理解の産物、つまり文献学的活動から生じてくる内実」としての「理解されたもの」(das Verstandene) をも考察しなければならない。かくして、われわれが前節で見たように、文献学は二つの主要部分に大別されることになる。すなわち、理解の機能と諸契機を考察する「形式的」部分と、理解された内容を素材に即して学問的に叙述する「実質的」部分である[42]。

第一の「形式的」部分は、当然のことながら、第二の「実質的」部分を前提とし、それに裏打ちされているが、しかしながら他方で、理解するという行為、あるいは文献学的活動は、原理的には、理解の産物、つまり理解されたものに先行しなければならない。ここにはある種の「原理の請求」(petitio

principii）があるように見えるが、しかしそれは避けがたいものであって、むしろ「事柄そのもののうちにある円環」[43]というべきである。ベークは解釈する上で避けがたいこのような「循環」を、明確に「解釈学的循環」（der hermeneutische Cirkel）[44]と呼んでいる。

文献学の形式的な部分としての「第一主要部」は、「理解の理論」（die Theorie des Verstehens）[45]を含んでいるが、これはさらに「解釈学の理論」（Theorie der Hermeneutik）と「批判の理論」（Theorie der Kritik）に二分される。というのは、「理解は一方では絶対的であり、他方では相対的である。すなわち、ひとは各々の対象を一方ではそれ自体として、他方では他との関係において理解しなければならない」からである。対象をそれ自体として理解することを、ベークは「絶対的理解」（das absolute Verstehen）と名づけるが、かかる理解を扱うのが解釈学（Hermeneutik）である。これに対して、対象を個と全体の関係で、あるいは他の個や理想との関係を通して理解することを、彼は「相対的理解」（das relative Verstehen）と呼び、かかる相対的理解を扱うのが批判（Kritik）であるという[46]。このような名称の可否は別にして、「理解の理論」を「解釈学」と「批判」に大別することは、シュライアーマッハーにおいてすでに一般的な慣行となっている[47]。

いずれにせよ、解釈学と批判は「理解の理論」のいわば両輪であり、「歴史的真理は解釈学と批判の共同作業（das Zusammenwirken der Hermeneutik und Kritik）によって突き止められる」[48]。しかし解釈学と批判というふうに区別してみても、実は両者の間には「循環」関係が成り立っており、これを脱却することは不可能である。なぜなら、対象をそれ自体として理解しようと努める解釈学を抜きにして、批判はみずからの課題を果たし得ないし、逆に異他なるものとの関わりないし関係を確定すること

に努める批判なくして、解釈学はその本務を遂行できないからである。

ところで、ベークの「理解の理論」において特徴的な区分は、解釈学と批判という区分にいわば横断的に掛け合わされてくる、「文法的」(grammatisch)、「歴史的」(historisch)、「個人的」(individuell)、「種類的」(generisch)[49] という区分である。これによって、解釈学は①「文法的解釈」(grammatische Interpretation)、②「歴史的解釈」(historische Interpretation)、③「個人的解釈」(individuelle Interpretation)、④「種類的解釈」(generische Interpretation) に区別され、批判は①「文法的批判」(grammatische Kritik)、②「歴史的批判」(historische Kritik)、③「個人的批判」(Individalkritik)、④「種類的批判」(Gattungskritik) に分けられるのであるが[50]、それではなぜこのような区分が成り立つのであろうか。

ベークによれば、解釈の実際の区分は解釈学的活動の本質からのみ導き出される。理解と解釈にとって本質的なのは、報告・伝承されたものの意味ないし意義が、それによって制約され規定されるところのものであり、言語の客観的意義がこれに属する。しかしいかなる語り手・書き手も言語を特有かつ特別な仕方で用い、みずからの個性に従って言語に変更を加える。それゆえ、その人を理解するためにはその主観性を考慮に入れなければならない。そこからベークは、客観的・一般的見地からの言語の解釈を「文法的解釈」と名づけ、主観性の見地からの言語の解釈を「個人的解釈」と名づける。しかしあらゆる報告・伝承の意味は、現実の歴史的諸関係によってさらに制約されている。したがって、一つの報告・伝承を理解するためには、ひとはこうした諸関係の中に身を置かなければならない。彼は歴史的現実に定位した解釈を「歴史的解釈」と名づける。しかし報告がその形式に従ってなされるところの、説話の

ジャンル（Gattung）にもまた留意しなければならない。叙述の主観的な方向と目的とに従って、韻文とか散文とかの異なった語り方が存するが、報告・伝承されている内容をこのジャンルという側面から解釈することを、彼は「種類的解釈」と名づける。彼によれば、客観的側面に力点の置かれた歴史的解釈が文法的解釈に結びつくように、主観的側面に重きを置く種類的解釈は個人的解釈に結びつくという。

ともあれ、ベークの考えでは、解釈学は以上の四種類の解釈に尽きるのであって、それをもう一度整理して示すと以下のようになる。

（1）報告されたものの客観的な諸条件からの理解

a）語義そのものから――文法的解釈

b）現実の状況との関係における語義から――歴史的解釈

（2）報告されたものの主観的な諸条件からの理解

a）主体それ自体から――個人的解釈

b）目的と方向のうちに存している主観的状況との関係における主体から――種類的解釈[51]

3．解釈学的循環の問題

われわれは前節において、ベークが「文法的解釈」、「個人的解釈」、「歴史的解釈」、「種類的解釈」という四種類の解釈を区別していることを見たが、それではこれら四種類の解釈は相互にどういう関係にあるだろうか。彼はこれについて、以下のように述べている。

たしかに、われわれは概念に従ってそれら〔四種類の解釈〕を明確に区別したが、しかし解釈そのものを実行する際には、それらはつねに混じり合う。ひとは個人的解釈を利用することなしには、語義そのものを理解することができない。なぜなら、誰かによって話される言葉は、いかなる言葉であろうとも、すでにその人が一般的な語彙から取り出したものであり、ある個人的な付加物をもっている。この付加物を抽出しようとすれば、ひとは話し手の個性を知らなければならない。同じように、一般的な語義は、現実の状況と説話のジャンルによって変更を加えられている。例えば、βασιλεύς〔一般的には「王」の意〕という語は、ホメロスの用語法においてとアッティカ共和国においてでは、全く異なった意味をもっている。χρόνος〔時、時間〕やσημεῖον〔しるし〕といった語は、哲学と数学と歴史学の叙述においては異なった意味をもっている。ひとは語義のこのような制約を歴史的解釈と種類的解釈によって確定しなければならないが、しかしながらそれらの要素はふたたび文法的な解釈によってのみ見出され得る。なぜなら、すべての解釈は文法的解釈から出発するからである。(52)

ここには明らかな「循環」関係があるが、それはまた文献学の形式的機能とその実質的結果との関係に存する困難に遡るものでもある。

すなわち、文法的解釈は文法の歴史的発展についての知識を必要とする。歴史的解釈は歴史一般についての特別な知識なしには不可能である。個人的解釈のためには個人についての知識が必要であ

り、そして種類的解釈は様式のジャンルについての歴史的知識に、したがって文学史に基づいている。そのようにこれらの異なった種類の解釈は、実際のいろいろな知識を前提としているが、これらの知識はすべての資料の解釈によってはじめて獲得され得るものである。しかしここから同時に判明するのは、この循環がいかにして解決されることができるかということである。すなわち文法的解釈は、それをさまざまな個人的ならびに現実的な諸条件のなかで考察することによって、ある表現の語義を突きとめる。そしてこれを言語全体へと拡大することによって、言語の歴史が作り出され、文法と辞書が作り上げられる。ところでこの文法と辞書は、その後ふたたび文法的解釈に奉仕し、同時に進展する解釈学的活動によって完成させられる。これによってひとは爾余の種類の解釈に対する、同時にまた実質的学問分野一般の構築に対する、基礎を手にする。こうした学問分野がより広範に発展すればするほど、解釈はより完全に成功する。(53)

以上のことは、ベークが繰り返し言及している、解釈につきものの「循環」、つまり「解釈学的循環」の問題にほかならない。彼はある局面においては、このような循環は「特別な技法を用いて回避されなければならない」(54) と述べているが、しかし別のところでは、「解釈学の課題が含んでいるこの循環は、必ずしもすべての場合に回避できるものではないし、また一般には決して完全には回避できるものではない」(55) とも語っている。なぜなら、個と全体、特殊と普遍はつねに相補い合う関係にあるだけでなく、また一切の類比を欠いた唯一無比なるものは、その意義を確定することがそもそも不可能だからである。まさに同一の対象が同時に文法的解釈と個人的解釈の、あるいは個人的解釈と種類的解釈の、あ

るいは歴史的解釈と種類的解釈の、唯一の基礎であるとすれば、所詮、解釈の循環は免れ得ないのである。かくして、「解釈学の課題はただ無限の近似（Approximation）によってのみ、つまり一項一項前進するが決して完結することのない漸進的な接近によってのみ、解決され得る」[56] というのが、ベークなりの問題解決の仕方なのである。

4．ベークの解釈学におけるロマン主義的要素

われわれはたったいま、通常の解釈の技法（Kunst）を用いて解釈学的循環を回避することは不可能であり、ただ解釈実践の鍛錬を積みながら一歩一歩前進して、問題解決に漸進的に接近するという「無限の近似」しかないことを見たが、しかし他方でベークは、「完全な理解が達成される」稀有な事例についても言及している。それは「有為なる感情」（[ein] fähiges Gefühl）を所有する「真正の解釈学的芸術家」（[der] ächte hermeneutische Künstler）のケースである。ベーク曰く、

> しかしながら、感情にとっては、ある場合には完全な理解が達成される。そして解釈学的な芸術家は、そのような理解を所有することで、難題を解決すればするほど、ますます完全になるであろう。しかしもちろん有為なる感情をさらに踏み込んで解釈することはできない。この感情とは、それのおかげで他者が認識したところのものが、いっぺんに再認識される当のものである。そしてそれがなければ、実際にいかなる伝達能力も存在しないであろう。[57]

つまり、ひとは感情のなかに与えられている「生き生きとした直観」(lebendige Anschauung)[58]によって、他人の個性を完全に把握することができるという。ベークはこの種の能力として、「正しい勘」(der richtige Takt)[59]や「精神の予見的な力」(die divinatorische Kraft des Geistes)[60]について言及している。

これに関連して、ベークは「どちらも相手と同じことを考えない」(οὐδεὶς ἕτερος ἑτέρῳ ταὐτὸ ἐννοεῖ)という他者認識の不可能性を暗示するゴルギアスの命題に対して、「似たものは似たものを知る」(ὅμοιος ὅμοιον γιγνώσκει)という別の命題を対置し、「これこそ、それによって理解が可能となる、唯一のものである。つまり同質性が必要なのである。このような仕方で解釈する人のみが、天才的な解釈者と名づけられ得る」[61]と述べている。

ベークは別の箇所で、「同質性」(Congenialität)の重要性について、以下のようにも述べている。

一般に歴史的解釈を適用できるかどうかについて、そしてとくに仮説的説明が許容できるかどうかについて、最終的な決定を下すものは、しばしば感情のなかに存在している。ここではとくに解釈者の同質性が肝要である。すなわち、著者の個性に身をおいて理解する人のみが、特定の場合の著者の念頭に特別な関係が浮かんでいたかどうかを、知るのである。[62]

つまり、解釈される対象との類似性を有し、「生まれつき理解するための眼識をもった人たち」が存

在するのであり、彼らは「根源的な才能」(ein ursprüngliches Talent) によって、解釈学的循環を突破して「いっぺんに」(mit einem Schlage) 事柄の本質を直観し理解するのである。ベークはそのような天才的な解釈者を、「精神的に同質的な解釈者」(der congeniale Ausleger)[63] とも呼んでいるが、いずれにせよ、この種の天分とか天才を引き合いに出すところに、ロマン主義者としてのベークの真骨頂を見ることも、あながち的外れではないであろう[64]。

5. 歴史主義との結びつき

さて、最後にわれわれが考察しなければならないのは、本稿の冒頭において提示したわれわれの根本的な問題意識、すなわちベークの解釈学における歴史主義との結びつきということである。われわれは最初に、シュライアーマッハーから始まる一般的解釈学の系譜において、歴史主義の結びつきはベークをもって嚆矢とするという作業仮説を立てたが、果たしてその仮説は正しいのか、またベークの解釈学において、歴史主義との結びつきはいかなる様相を呈しているのかを解析しなければならない。この点を明らかにするために、われわれはまずベークの解釈学とシュライアーマッハーのそれとの簡単な比較——細部に踏み込んだ本格的な比較は将来の重要な課題である——を試みてみたい。

シュライアーマッハーの解釈学は、もともとは「文法的解釈」(grammatische Interpretation) と「技術的解釈」(technische Interpretation) の二区分をもって構想されたが、やがてそこに「心理学的解釈」(psychologische Interpretation) なるものが立ち現れ、やがてその新しい用語に大きな比重が置かれる

ようになる。しかし「技術的解釈」と名づけられていたものが、はたして「心理主義的解釈」に完全に置き換えられるかというと、実は単純にそうはいかない。そのあたりを究明することは、シュライアーマッハーの解釈学に関する研究の重要課題の一つである[65]。

ところで、ベークはシュライアーマッハーの解釈学について、『文献学的諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』において、非常に興味深いコメントをしている[66]。まず「心理学的解釈」に関しては、ベークによれば、人間の個性というものは「徹底的に生き生きしたもの、具体的なもの、積極的なもの」であり、一般的な法則や分類項目によって作業する心理学によって把捉できるものではない。

そこからわたしは個人的解釈を――シュライアーマッハーが行なっているように――心理学的解釈(die psychologische [Auslegung]) と名づけることを避けるのであるが、それはこの名称があまりにも広範だからである。いろいろな言葉の根本的意義が定義づけて捉えることのできない直観であるように、個人的な文体もまた概念によっては完全に特徴づけることはできない。そうではなく、それは解釈学によって直観の仕方そのものとして具象的に再生され得るものである。[67]

シュライアーマッハーの「技術的解釈」についても、ベークは次のような苦言を呈している。

・・・種類的解釈をいたるところで同じ程度に適用することはできない。なぜなら、個性はしばしばその作用において、そのなかに具わっている方向性にしたがうが、その際眼前に浮かんでいる理

想への特別な関係は、まだ可視的にならないからである。個性のそのような自由な演技は、例えば軽い会話のなかで生起する。これに対して、思想的な関係は完結した発話において最も強烈に現れる。そこではすべてのことは一定の目的に関係しており、そしてその結果はあらかじめ考えられ、方法的に達成しようとされたものである。言語的作品の技術（Technik）はそのような厳格な関係のなかに存しているので、シュライアーマッハーはこの側面からの発話の理解を技術的解釈（technische Auslegung）と名づけた（『解釈学と批判』、148頁以下）。しかしながら、この表現は種類的解釈全体を表示するためにはあまりにも狭すぎる。[68]

以上のことから明らかになることは、ベークの「個人的解釈」はシュライアーマッハーの「心理学的解釈」に、「種類的解釈」は「技術的解釈」にほぼ対応しつつ、それぞれが師であるシュライアーマッハーの解釈学に見いだされる（とベークが考える）欠陥を修正する意図をもっていることである。それに加えて、両者の解釈学の比較で判明することは、シュライアーマッハーの解釈学では重要性を見いだすことのできない「歴史的解釈」が、ベークにおいてはしっかりとその位置を占めていることである[69]。もちろん、「歴史的解釈」（historische Interpretation）は、シュライアーマッハー以前にすでに見いだされるものであって、たとえばG・L・バウアーは一八世紀末に、「歴史的解釈が詳しく調べるのは、著者がその著書で何をどの程度考えていたかということ、さらに著者がどのような概念をかの意味に結びつけていたかということ、別の著者たちも同じ概念をかの意味に結びつけることを要求されているということである」[70]、と述べている。だが、まさにこの引用文が端的に示しているように、このよう

な意味での「歴史的解釈」は、むしろシュライアーマッハーの「心理学的解釈」の決定的な諸契機を先取りするものである。ベークにおける「歴史的解釈」はこれとは明確に区別されなければならない。

ベークによれば、解釈学の対象は一般的には「言語的記念物」(Sprachdenkmal)であるが、言語的記念物そのものを理解するためには、文法的解釈によってその客観的意義を知るだけでは十分ではない。言語的記念物そのものの意義は、一部は言葉そのもののうちには存在せず、むしろ現実的事態への関係によってその客観的意味に結びついている、いろいろな表象に存しているという。そこで彼はこの側面から言葉を理解することを、「歴史的解釈」の主たる課題と見なすわけである。語り手や書き手が言葉を用いて述べる内容は、歴史的に与えられた事態との現実的結合のうちにあり、こうした歴史的所与は語り手や書き手の暗黙の前提となっている。したがって、解釈者が言語的記念物の客観的側面を理解するためには、文法的解釈だけでは不十分で、歴史的状況についての知識がまた必要とされるのである。ベークはその一つの事例として、タキトゥスの『年代記』第一章を挙げ、ローマの政治状況についての知識をもたない人には、それは理解できないとしている。そのほかにも、例えば ホラティウスの詩行(『諷刺詩』第一巻、1、105)――「タナイスと、舅のウィセリウスとの間には誰か〔中間〕がいる」(Est inter Tanain quiddam socerumque Viselli) ――は、文法的に徹底的に正しく解釈することができるとしても、もしひとがローマの私生活の特殊な歴史から、タナイスがまったくの宦官であり、舅のウィセッリウスが恐ろしい陰嚢ヘルニアを患っていたことを知らなければ、そこに含まれている当てこすりはわからない、と述べている。さらに悲劇作家や喜劇作家の作品を理解する場合にも、あるいはプラトンのような哲学者の思想を理解する場合にも、さまざまな歴史的関係は存在しているのであり、しば

しばそれについての知識があるかないかで、解釈に決定的な差異が生じるという。そして実に卓見であると思われるが、ベークは「叙述が歴史的なものの性格から遠ざかれば遠ざかるほど、より高い度合いにおいてそれは歴史的解釈を必要とする」(71) というパラドクスを指摘している。

それはともあれ、ベークの解釈学にとって歴史的解釈がいかに重要であるかは、不朽の名著といわれる『アテナイ人の国家財政』*Die Staatshaushaltung der Athener* (1817, ^{2}1851, ^{3}1886) を見ればよくわかる。それは貴金属、土地、鉱山、家屋、奴隷、家畜、衣服、食物などの価格や、各種の税金や国民の収入などを示す大量の資料に基づいて、アテナイ国家の財政機構を実証的に明らかにしようとしたパイオニア的研究で、それまでの「古典文献学を歴史科学に変化させた」ものである。実際、ベーク自身が十分にそのような自覚をもってみずからの研究に従事していたことは、ゴットフリート・ヘルマンとの論争の中で表明された、次のような見解のなかに遺憾なく示されている。

> ・・・わたしは次のことを前提している。すなわち、文献学は、比較的完結した時代のある一定の民族に関しては、その活動の総体、つまりその民族の全生活と全働きを、歴史的・学問的に認識するものである、ということである。この生活と働きは、当然それによって生み出されたものも含めて、文献学によって考察されるべき事柄である。だがそれは、家族関係や国家関係がそれによって作り出される実際的なものであるか、あるいは宗教、芸術、知識などの理論的なものである。思考の形式としての言語が、わたしがここで簡潔に知識と呼んだ領域に属しているということは、容易に示されることができる。したがって、それはまた・・・文献学が考察しなければならない事柄に

もともに属しており、文献学者が追構成すべき事柄として認識されなければならない。そのことによって、文法学は文献学の一連の実質的部分の中に入って来る。解釈学と批判は、単なる形式的部分としてのみ、かかる実質的部分に対立しているにすぎない。しかし古代的な民族の活動の表現が、大部分は言語的な記念物において伝承されているかぎり、たとえそうした記念物が非言語的な事実や思考をも含んでおり、文献学者はそれを再認識すべきであるとしても、言語は文献学にとって、同時に、古代の爾余のほとんどすべての産物を再認識するための手段であり、そして文献学は言語的な記念物から、言語自体の理解にとどまり続けることなく、事実と思考の全領域を叙述しなければならない。(72)

ここに明確に語られているように、ベークが提唱・実践した文献学は、言語的作品や文化財を、それらが成立した歴史的コンテクストを顧慮しつつ、解釈し理解することを目指したものである。彼の解釈学を構成する四本の柱の一つとして、理解されるべき対象を「現実的状況との諸関係」(Beziehungen auf reale Verhältnisse)(73)において理解しようと努める、「歴史的解釈」を含んでいることは意味深長である。われわれはここにのちに「歴史主義」として特徴づけられる精神的態度ないし思潮の端緒を読み取ることができるであろう(74)。

むすびにかえて

以上、われわれはベークの解釈学を、彼の文献学についての考え方を洗い直す仕方で考察してきた。いまだ十分な考察とはいえないが、われわれの限られた考察からも、彼の古典文献学が――したがってまた彼の解釈学が――非言語的な事実や表象にも開かれたものであり、しかも歴史主義に馴染む性格をもっていることが確認された。解釈学と歴史主義という二つのモティーフが、古典文献学者ベークにおいて、どのように密接に結びついているかについては、今後さらなる研究が必要であるが、少なくともシュライアーマッハーの解釈学においては表面に現れて来ない歴史主義の基調が、彼と精神的共闘を組んでいた弟子のベークの中に顕著に見られることは、非常に興味深いことである。ベークにおいて頭をもたげてきたこのモティーフが、その系譜に連なるドロイゼンやディルタイにおいてどのように継承され、いかなるメタモルフォーゼを被るかを解明することは、われわれが今後取り組まなければならない重要な研究課題であろう。

（やすかた　としまさ・北海学園大学教授）

＊本稿は、平成21–23年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般））を交付されて行なっている研究「解釈学と歴史主義――A・ベークとJ・G・ドロイゼンについての比較研究――」の成果の一部であると同時に、平成21年度北海学園学術助成による「アウグスト・ベークの解釈学についての研究」の成果の一部である。

［註］

（1）N. Hammerstein (Hrsg.), *Deutsche Geschichtswissenschaft um 1900* (Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GMBH, 1988)、Friedrich Jaeger & Jörn Rüsen, *Geschichte des Historismus: Eine Einführung* (München: Verlag C.H. Beck, 1992)、O.G. Oexle, *Geschichtswissenschaft im Zeichen des Historismus* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1996)、O.G. Oexle & J. Rüsen (Hrsg.), *Historismus in den Kulturwissenschaften* (Köln-Weimar-Wien: Böhlau Verlag, 1996)、Wolfgang Bialas & Gerard Raulet (Hrsg.), *Die Historismusdebatte in der Weimarer Republik* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1996)、G. Scholtz (Hrsg.), *Historismus am Ende des 20. Jahrhunderts* (Berlin: Akademie Verlag, 1997)、Fulvio Tessitore, *Kritischer Historismus.* Gesammelte Aufsätze (Köln, Weimar, & Wien: Böhlau Verlag, 2005)、Jens Nordalm (Hrsg.), *Historismus im 19. Jahrhundert: Geschichtsschreibung von Niebuhr bis Meinecke* (Stuttgart. Philipp Reclam, 2006)、Otto Gerhard Oexle (Hrsg.), *Krise des Historismus—Krise der Wirklichkeit: Wissenschaft, Kunst und Literatur 1880-1932* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2007) などは、その消息をよく伝えている。

（2）拙論「トレルチと『歴史主義』の問題――概念史的・問題史的考察の試み――」、『年報　新人文学』（北海学園大学大学院文学研究科）第2号（二〇〇五年一二月）、6 - 83頁所収、および「トレルチと『歴史主義』の問題（承前）――概念史的・問題史的考察の試み――」、『年報　新人文学』（北海学園大学大学院文学研究科）第3号（二〇〇六年一二月）、36 - 111頁所収を参照されたい。

（3）Cf. Joachim Wach, *Das Verstehen. Grundzüge einer Geschichte der hermeneutischen Theorie im 19. Jahrhundert* I-III (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1926-1933; Nachdruck, Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1966); Hendrik Birus (Hrsg.), *Hermeneutische Positionen. Schleiermacher-Dilthey-Heidegger-Gadamer* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1982); Jean Grondin, *Einführung in die philosophische Hermeneutik* (Darmstadt: Wissenschaftliche

Buchgesellschaft, ²2001).

(4)「一八〇五年および一八〇九／一〇年の箴言集」(Die Aphorismen von 1805 und 1809/10) のなかに、「解釈に際しての主要な事柄は、ひとが自分自身の心情から抜け出て、著者の心情へと赴くことができねばならないということである」という一文があるが、H・キンメルレはそれを「歴史主義を呈示する覚え書き」(eine ... auf den Historismus vorweisende Notiz) と呼び、そこに「歴史主義的な理解の実践」(die historistische Verstehenspraxis) の萌芽を読み取っている。Heinz Kimmerle, "Einleitung" zu Fr. D. E. Schleiermachers *Hermeneutik*, nach den Handschriften neu herausgegeben und eingeleitet von H. Kimmerle, 2. Aufl. (Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1974), S. 16–17.

(5) Cf. Albert Schweitzer, *Geschichte der Leben-Jesu-Forschung* (Hamburg: Siebenstern Taschenbuch Verlag, 1972), S. 100.

(6) シュライアーマッハーの解釈学を十全な仕方で論ずる準備は、筆者にはまだ整っていないが、それは筆者の不勉強によるだけでなく、批判的校訂作業を経た信頼できるテクストが未だ存在しないことにもよる。シュライアーマッハーの解釈学のテクストとしては、従来 Friedrich Schleiermacher, *Hermeneutik und Kritik, mit besonderer Beziehung auf das Neue Testament*. Aus Schleiermachers handschriftlichem Nachlasse und nachgeschriebenen Vorlesungen herausgegeben von Friedrich Lücke (Berlin: G. Reimer, 1838) (=*Sämmtlichen Werke*, I, Abt., Bd. 7) があり、これはM・フランクによって有益な序論が付されたかたちで、一九七七年にそのリプリント版が出ている。Cf. F.D.E. Schleiermacher, *Hermeneutik und Kritik. Mit einem Anhang sprachphilosophischer Texte Schleiermachers*, herausgegeben und eingeleitet von Manfred Frank (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1977).

しかしこれは編集作業にいろいろな問題が含まれており、この点を改正すべくH・キンメルレが独自の資料調査に基づいて、未出版の手書きの遺稿を編集して、Fr[iedrich] D[aniel] E[rnst] Schleiermacher, *Hermeneutik*, nach den Handschriften neu herausgegeben und eingeleitet von H. Kimmerle (Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1959) を刊行した。しかしここにもまだ重大な事実誤認が含まれているとの指摘があり、キンメルレはさらにそれに修正を加えて、一九七七年にその第二版（前掲の注4参照）を世に著した。これによってシュライアーマッハーの解釈学の発展過程がかなり正確にわかるようになったが、その後さらにW・ヴィルモントの研究によって、

より詳細な特質が明らかになってきた。Cf. „Friedrich Schleiermachers “Allgemeine Hermeneutik” von 1809/10, “ herausgegeben von W. Virmond, in: *Schleiermacher-Archiv,* Bd. I (Berlin & New York: Walter de Gruyter, 1985), S. 1269-1310. しかし現在刊行中のシュライアーマッハーの批判的校訂全集 *Friedrich Schleiermacher Kritische Gesamtausgabe* に収録される予定の、ヴィルモントの手による批判的校訂を経たテクストは、現在のところまだ出版されていない。

(7) August Boeckh の名前の日本語表記については、別のところで詳しく論じたが（拙論「アウグスト・ベークと文献学」、『北海学園大学人文論集』第37号〔二〇〇七年一〇月〕、註1参照）、いまだに「ベック」という表記がまかり通っているので、「アウグスト・ベーク」と表記するのが正しい根拠を、再度示しておく。

まず英語の標準的な人名辞典である *Merriam-Webster's Biographical Dictionary* (Springfield, Mass.: Merriam-Webster, Inc., 1972) には、Böckh という見出しで出ており、その発音は〔bûk〕となっている。ちなみに〔û〕の発音は、schön〔shûn〕Goethe〔gû´té〕における ö ないし œ のそれと同じである (p. 163)。次にベークの本国ドイツで出版されているドゥーデンの発音辞典によれば、これまた見出し項目は Böckh となっているが、その発音は Öl〔ø:l〕の母音と同じ〔bø:k〕となっている (*Duden*, Band 6: *Aussprachewörterbuch. Wörterbuch der deutschen Standardaussprache.* 2., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Bearbeitet von Max Mangold in Zusammenarbeit mit der Dudenredaktion. Mannheim: Duden Verlag, 1974, S. 184)。

ここからだけでも、Boeckh の発音としては長音の「ベーク」が原語の発音に一番近いと思われるが、まだ納得しない方もいるであろうし、そもそも Boeckh と Böckh のどちらが正しいのかという問題も残っている。そこでさらに踏み込んだ考察が必要となる。

まず、Boeckh か Böckh かという問題に関しては、これまでに出版された最も詳細な伝記的著作である Max Hoffmann の *August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1901) が、これに明快な答えを与えている。ベーク本人は、自筆の書類や書簡では終始一貫して Böckh を用いており、ラテン語の著作でのみ Boeckhius と記したという (S. 2, Anm. 1)。この点に関しては、Ernst Vogt (“Der Methodenstreit zwischen Hermann und Böckh und seine Bedeutung für die

Geschichte der Philologie," in *Philologie und Hermeneutik im 19. Jahrhundert. Zur Geschichte und Methodologie der Geisteswissenschaften,* herausgegeben von H. Flashar, K. Gründer, A. Horstmann [Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1979], S. 109, Anm. 14)　や Bernd Schneider (*August Boeckh. Altertumsforscher, Universitätslehrer und Wissenschaftsorganisator im Berlin des 19. Jahrhunderts. Ausstellung zum 200. Geburtstag 22. November 1985-18. Januar 1986* [Berlin: Staatsbibliothek Preußischer Kulturbesitz, 1985], S. 9) も、まったく一致した見解を示している。

次に、ö ないしœ の発音に関してであるが、Ursula Schaefer はこれを「長母音」(ein langer Vokal) であると明言している（"Vorwort," Ernst Vogt & Axel Horstmann, *August Boeckh (1785-1867). Leben und Werk.* Zwei Vorträge [Berlin: Humboldt-Universität zu Berlin, 1998], S. 6, Anm. 2)。

以上のことから、「アウグスト・ベーク」という表記が最も適切である、と結論づけることができる。

(8) Annette Wittkau, *Historismus. Zur Geschichte des Begriffs und des Problems* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ²1994), S, 25.

(9) ドロイゼンは一八二六年の夏学期から一八二八／二九年の冬学期までベルリン大学で学んだが、一八二六の夏学期にはベークの "Demosthenes Rede von der Krone" と "Geschichte der griechischen Literatur" を、一八二六／二七年冬学期には "Tacitus Historien" と "Metrik" を、一八二六年夏学期には "Encyclopädie der philologischen Wissenschaften" を、一八二七／二八年冬学期には "Griechische Alterthümer" を受講しているし、一八二七年夏学期にはすでに彼の "Philologisches Seminar" に受け入れられている。Cf. Christiane Hackel (Hrsg.), *Johann Gustav Droysen 1808-1884* (Berlin: G+H Verlag, 2008), S. 21; Max Hoffmann, *August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1901), S. 472.

(10) ブルクハルトは一八三九年の秋から一八四三年の春まで（但し、一八四一夏はボン大学で学ぶ）ベルリン大学で学んだ。ベルリン大学在学中は、ランケのゼミに所属していたが、ベーク、ドロイゼン、ヤーコプ・グリム、フランツ・クーデラーなどの講義を受講している。『下村寅太郎著作集9　ブルクハルト研究』（みすず書房、1994年）29–34頁参照。cf. Curt Hänel, *Skizzen und Vorarbeiten zu einer wissenschaftlichen Biographie Jakob Burckhardts.* Zweite Folge: Jakob Burckhardts und August Boeckh (Leipzig: Druck von Bruno Zechel, 1912), S. 1. さらに、J・

ブルクハルト、新井靖一訳『ギリシア文化史』第一巻（筑摩書房、一九九一年）、五頁参照。

(11) Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd. 7, *Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften* (Stuttgart: B.G. Teubner & Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1958), S. 114.

(12) Frithjof Rodi, *Erkenntnis des Erkannten. Zur Hermeneutik des 19. und 20. Jahrhunderts* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1990), S. 7.

(13) アウグスト・ベークに関しては、我が国にはまだ信頼できる本格的な研究は一つも存在しない。外国語の文献としては、一〇〇年以上たった今でも、前掲（註9）のMax Hoffmann, *August Böckh. Lebensbeschreibung und Auswahl aus seinem wissenschaftlichen Briefwechsel* が最も有益かつ信頼できるな情報を含んでいる。ベークと彼の文献学については、拙論「アウグスト・ベークと文献学」、『北海学園大学人文論集』第37号（二〇〇七年一〇月）119 - 165頁を参照されたい。

(14) August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck, zweite Auflage besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1886), S. 10. 傍点を付した部分は原文ではゲシュペルト（隔字体）。

(15) Volker Gerhard, Reinhard Mehning, und Jana Rindert, *Berliner Geist. Eine Geschichte der Berliner Universitätsphilosophie* (Berlin: Akademie Verlag, 1999), S. 55.

(16) G.P. Gooch, *History and Historians in the Nineteenth Century* (Boston: Beacon Press, 1959), p. 29.

(17) H. v. Srbik, *Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, Bd. 1 (München, 1950), S. 367; 筆者未見につき、Jörn Rüsen, "Johan Gustav Droysen," in: *Deutsche Historiker II*, herausgegeben von H. -U. Wehler (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1971), S. 7からの孫引き。

(18) Johann Gustav Droysen, *Grundriß der Historik* (Leipzig: Verlag von Veit & Comp., 1868), S. 9.

(19) Johann Gustav Droysen, *Historik* (München: R. Oldenbourg, [5]1967), S. 83.

(20) Christiane Hackel, *Die Bedeutung August Boeckhs für den Geschichtstheoretiker Johann Gustav Droysen. Die Enzyklopädie-Vorlesungen im Vergleich* (Würzburg: Königshausen & Neumann, 2006).

(21) Jean Grondin, *Einführung in die philosophische Hermeneutik* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, ^{2}2001).

(22) Ibid., S. 115-132.

(23) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 10, 11, 15, 18, 53.

(24) J・ワッハは「認識されたものの認識」という定式に関して、ただちに二つの補足がなされるべきだという。一つは、認識されたもののなかに、概念的、あるいは学問的に究明されたもののみを認めようとしてはならないこと、二つ目は、かかる定式に従えば、文献学と歴史学との境界線が不明確になるように思われるが、にもかかわらず、ベークはその相違もちゃんと自覚しているということである。Cf. Wach, *Das Verstehen*, Bd. I, S. 178-179.

(25) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 5-10.（「人間精神によって」の部分の傍点は筆者によるもの）

(26) Ibid., S. 56.

(27) Ibid., S. 10, 11, 16, 53.

(28) Ibid., S. 16.

(29) Ibid., S. 11.

(30) Ibid., S. 16.

(31) Ibid., S. 10-11.

(32) Ibid., S. 56.

(33) Ibid., S. 19.

(34) Ibid., S. 14.

(35) Ibid., 16.

(36) Ibid., S. 12, 19, 54, 80; cf. “reconstructiv,” S. 17.

(37) Ibid., S. 16, 125; cf. “neu construiren,” S. 56.

(38) Ibid., S. 14, 15, 17, 19, 20, 127.

(39) Ibid., S. 14.
(40) Ibid., S. 15.
(41) Ibid., S. 53.
(42) Ibid.
(43) Ibid., S. 54.
(44) Ibid., 102, 109, 142.
(45) Ibid., S. 55.
(46) Ibid.
(47) Cf. Friedrich Schleiermacher, *Hermeneutik und Kritik, mit besonderer Beziehung auf das Neue Testament*, aus Schleiermachers handschriftlichem Nachlasse und nachgeschriebenen Vorlesungen hrsg. von F. Lücke (Berlin:, 1838). なお、Fr・A・ヴォルフにおいては、Sprachlehre oder Grammatik、Hermeneutik、Kritikの三部構成になっているという。Cf. Wach, *Das Verstehen*, Bd. I, S. 67.
(48) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 178.
(49)「種類的」(generisch) という形容詞は、もともと「種属」を意味するラテン語genusに由来するが、この形容詞と「批判」(Kritik) を掛け合わせたものに相当する部分が、Gattungskritikと呼ばれていることから明らかなように、「種類的解釈」とは、「発話のジャンル」(Redegattungen) に基づいた解釈のことである。すなわち、ここでいう種類とは「文芸作品の様式上の種類・種別」のことである。したがって、「種類的解釈」(generische Interpretation) は「ジャンル的解釈」と訳すこともできるであろう。
(50) ベークは「個人的批判」にはIndividualkritikという用語を基本的に充てているが、individuelle Kritikという用語もまま見出される。同様に、「種類的批判」の場合はGattungskritikが一般的であるが、generische Kritikという用語も用いられないでもない。
(51) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 83.
(52) Ibid.

(53) Ibid., S. 84.
(54) Ibid., S. 85.
(55) Ibid., S. 85–86.
(56) Ibid., S. 86.
(57) Ibid.（傍点筆者）J・ワッハは、同様の見解がドロイゼンにも見出されるとして、*Grundriss der Historik* の§11を引証している。念のために翻訳しておくと、「理解（Verstehen）の論理的メカニズムから理解（Verständniss）の行為は区別される。理解の行為は既述せる諸条件のもとで、あたかも接近する起電盤の間に発する閃光のごとく、交接における受胎のごとく、直接的直観として、創造的作用として行なわれる」。Cf. Wach, *Das Verstehen*, Bd. I, S. 223, Anm. 5.
(58) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 86.
(59) Ibid., S. 87.
(60) Ibid., S. 184. Divination（予見、予感）あるいはdivinatorisch（予見的、予感的）という概念は、シュライアーマッハーの解釈学においても頻出するが（Schleiermacher, *Hermeneutik*, 2. Aufl., S. 186, Sach- und Namenregister の"Divination"の項参照）、それだけでなく、例えばドロイゼンの史学論やトレルチの歴史哲学などでも重要な意義を有している。Cf. Johann Gustav Droysen, *Historik*. Historisch-kritische Ausgabe von Peter Leyh, Band 1 (Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Frommann Verlag, 1977), S. 401, 428; Ernst Troeltsch, *Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 16, *Der Historismus und seine Probleme (1922)*, S. 213, 531, 998.
(61) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 86.
(62) Ibid., S. 118–119. Kongenialität（ベークの原典テクストでは旧式表記のCongenialität）は「同質性」とも「類縁性」とも訳し得るが、いずれにせよ、この概念は歴史の認識論においてはよく知られたものである。例えばドロイゼンは、次のように述べている。「思想家や演説家であるためには、研究と修練とが同じだけ必要であるが、しかしひとがみずからに与えることのできないもののみが、すなわちまさにこの種の活動のための天分（Begabung）が、両方のものを強化し発展させる。そして歴史家の天分は、なかんずく現実的なものに対する感覚である。すなわち、現

象化する事物のうちに、生き生きとして作用している力を、それによってそれらの事物が存在し生成しているところのものを、その真理を、直観する同質性（Kongenialität）である。」「理解の可能性は、歴史的材料として存在している諸表出が有する、われわれに同質的な性質のうちに存する。」Droysen, *Historik*. Historisch-kritische Ausgabe von Peter Leyh, Band 1, S. 64f. 423. Cf. Troeltsch, *Kritische Gesamtausgabe*, Bd. 16, S. 993.

(63) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 122. ベークはその具体例として、ヴィーラントのホラティウス解釈とキケロ解釈、シュライアーマッハーのプラトン解釈を挙げている。Ibid., S. 168.

(64) しかしこのことをもって、ベークの解釈学を「ロマン主義解釈学」として断罪することは正しくない（cf. Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke 1, Hermeneutik 1* [Tübingen : J.C.B. Mohr, 1990], S. 177-222）。ベークが単なるロマン主義者であったとしたら、『アテナイ人の国家財政』のような作品は誕生しなかったであろう。彼のなかには、客観的データを重んじる実証的精神が同時に息づいており、彼が「近代的な古代経済史の創設者」でもあったことを、われわれはつねに忘れてはならない。Cf. *August Boeckh (1785-1876). Forscher, Hochschullehrer, Zeitzeuge*, Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität zu Berlin 36 (1987) 1, S. 1-70.

(65) シュライアーマッハーの解釈学における「技術的解釈」と「心理学的解釈」の関係については、テクストが整備されていなかったこともあって、従来必ずしも実情が正しく捉えられていなかったが、キンメルレが編集した『解釈学』の第二版のテクストによって、ようやく正確なところがわかるようになってきた。詳細に関しては、Kimmerle, “Einleitung,” S. 22-23を参照されたい。

(66) ベークは本書の第一主要部の冒頭の文献リストにSchleiermacher, *Hermeneutik und Kritik mit besonderer Beziehung auf das neue Testament*を挙げた上で、「わたしの叙述においては、シュライアーマッハーの理念はこの著作からではなく、より以前に報告された内容から利用されているが、こうした事情のため、わたしはもはや自他の区別〔＝自説とシュライアーマッハーの学説との区別〕をできる状態にない」（Ibid., 75）、と述べている。

(67) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 127.

(68) Ibid., S. 141.

(69) 但し、われわれが留意しなければならないのは、ベークが「歴史的」(historisch) という用語を「最も広い意味で」用いているということである。それと同時に、著者の個性や発話のジャンルに応じて歴史的解釈の適用可能性に幅があると見なしていることである。Ibid., S. 113. Cf. Wach, *Das Verstehen*, Bd. I, S. 202.

(70) Georg Lorenz Bauer, *Entwurf einer Hermeneutik des Alten und Neuen Testaments: Zu Vorlesungen* (Leipzig: Weygand, 1799), S. 96. 筆者未見につき、ヘンドリック・ビールス編、竹田純郎・三国千秋・横山正美訳『解釈学とは何か』(山本書店、一九九六年)、37頁より借用。

(71) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 113.

(72) August Boeckh, "Ueber die Logisten und Euthynen der Athener," in: *Gesammelte kleine Schriften*, Bd. 7 (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1872; Nachdruck, Hildesheim, Zürich, & New York: Georg Olms Verlag, 2005), S. 264f.

(73) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, S. 112.

(74) われわれと同様、J・グロンディンも「文法的解釈」、「個人的解釈」、「種類的解釈」に加えて、「歴史的解釈」がしっかりと位置を占めているところに、ベークの解釈学の歴史主義への傾斜を読み取っている。Cf. Grondin, *Einführung in die philosophische Hermeneutik*, S. 117.